
候補生たち

杉林機構

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

候補生たち

【Nコード】

N9305Y

【作者名】

杉林機構

【あらすじ】

ある夏の日、府本里美は神社で倒れ、目が覚めるといわく有り気な学院への入学を勧められるのであった。

1 わたしが、良い子じゃないって。

神社自体にはなんの興味もなくて。

だから名前も知らないし、なんの神様かも知らないし、ちゃんとお参りしたこともない。

けれど、たぶん気にはなっていて。

うまく説明できないけど、古い大きな木がたくさんあって、いつも暗くて、いつも人の気配がなくて、いつもひんやりして、なんかとくべつな場所って感じがしてた。友だちとケンカしたとき、親に叱られたくないとき、色々悩んだり落ち込んだりしたときつまり、ひとりになりたいとき、つい行ってしまふ場所だった。

お賽銭箱の裏側に座って、向こう側にはきつと神様がいるはずの扉にかかった重たそうな錠前をぼんやり見つめていると、ふしぎと力が湧いてくるような、そんな気がして。

わたしの場所っていうか、パワースポット？ みたいな。

でも、あの日はちよつと違っていて。

友だちとプールに行く約束があつて家を出たのに、気づいたら神社にいた。セミの鳴き声に囲まれて、じつとりと汗をかいて、下に着ていた水着が変に張り付いていて、暑いのになんだか寒いような、いつもとちがって気持ち悪い感じ。

「あー、あー、あーあー……」

わたしはバカみたいに口をあけて、声を出していた。

そうしていないと息苦しかったから。

遅れるからメールしようとか、はやく泳いでさっぱりしようとか、そろそろ宿題を片付けようとか、帰りにアイス食べようとか、色んなこととか、からまりながら頭の中をぐるぐる洗濯機みたいに回っていて、けど、なにひとつ考えてもなくて、どこかおかしかった。そして足は勝手に動いていた。

「……あー、あーあー、あー、あー、あーあー」

神様の集金箱をいつものように無視して、その奥の扉にかけられた錠前に触れる。なんとなく、けれど、たしかに開く予感があった。実際、鍵もなにもなくカチリと動いて、血みたいな鉄の匂いが鼻を刺す。中に入るうなんて思ったこと、一度だつてなかったのに。わたしはガチャガチャ外した錠を投げ捨て、力いっぱい扉を開いていた。

冷たくて、かび臭い空気があふれ出て。

「こんにちは」

不意に、背後から声をかけられて。

「あつ」

わたしは吐き出しかけていた声と一緒に息を飲み込んだ。

悪いこと、してる。そう思ったら背中からどつと汗が出てきて、それがすぐに冷えて、身体がひやっと震えて、動けなかった。一度、本屋さんで万引きした中学生が呼び止められるのを見たことあつて、逃げられそうなのに、逃げられなくなっちゃう。こんな感じなんだ。捕まるんだ。

「聞こえなかった？ こんにちは」

「……」

どつくとつく。

息苦しくなるような、脈打つ血管の音を耳の奥に感じながら、両親のこと、考えてた。一人娘が捕まったら、どう思うだろうって。けど、あんまり深刻な気持ちにならなかつた。逆に、あの仲良しで優しい二人が、どんな風になつてしまふかつて、ワクワクする。『あんななんかウチの子じゃない！』とか言われちゃうとかつて。こんな日がいつかくるって思ってたのかもしれない。なんか変だけど、わかつてた。

わたしが、良い子じゃないって。

どつくとつく。

「どうしたの？ ねえ？」

足音がどんどん近付いてくる。

お父さんが、これまであまり聞いたことのない落ち着いたトーンで言った。

横でお母さんがうなずいて、わたしもうなずいて。

「ぶはっ」

生ぬるい水で顔を洗ったら、それほど悪いことしたっけ？ と冷静になる。たしかに、神社の社殿に勝手に入るのは悪いことだろうけど、学校の先生を呼ぶほどのこと？ 鍵だつて最初から壊れていたのでは？ 中にも入ってないし？ 居間にいた女の人が神社の人？ 次から次へと疑問が湧いてきて、まとまらなくて。

「どうでもいいや」

すぐに考えるのをやめた。

あの一瞬にワクワクしたような感情はもうどこにもなくて、これから面白くもなんともなさそうな現実的お説教が待ってるだけと思つたら、なにもかもバカバカしい。わたし、どうかしてた。夏休みのなにかで浮かれて。くっだらない。

部屋に戻ってケータイを見ると、約束をすっぱかしたらしいことだけ現実。

心配するメールから、だんだん怒っているらしいメールへ。

フォロー、大変だ。けど、ともかく先生を待たせていた。言い訳は後で考えよう。さくつとマジメに叱られればお説教もそんなに長時間にはならないはずだ。こんなに朝早くから来ているのだし、先生も女の人も、そもそも両親だつて今日の予定がある。

「お待たせしました」

できるだけよそ行きの声で、わたしはわざとらしく反省しながら居間に戻る。

廊下で正座をして襖を開ける。テレビで見た旅館の仲居さんがそうするようにおしとやかにそして深々と頭を下げて、バカみただけど、子供なりに真剣にやつてるんだなと先生たちが思ってくれれば、笑われてもオツケー。そんな、きつたない計算で。

「その、昨日は、申し訳ありませんでした」

そう言っつてゆつくりと頭を上げると、

「あ、れ？」

四人の大人たちは不思議そうな顔でわたしを見ていた。

「なにを謝っているんだ？ 里美」

「……えー、つと、昨日のこと、じゃないの？」

「それなら、謝るんじゃないかって、お礼だろう。昨日、神社で倒れていた里美を家に連れてきてくださったんだ。吉田先生と、こちらの方が」

と言いながら、お父さんは繰り返すように頭を下げる。

「僕は気付かなくて、通りすがりに見つけたのは平島さんですから、担任の先生は慌てて謙遜し、

「そんな、私も偶然ですよ、昔から寺社仏閣に興味があるだけで、ついふらつと覗いただけで、そんなお礼を言われるようなことではありません。里美さんが無事でなによりです」

ひらしまさんと呼ばれた女の人が上品に笑う。

両親や先生よりは若いだろうか、でも、なんだか高そうなスーツを着ている。シャツの生地もやたらなめらかだ。顔とか身体つきはそれほど印象に残る感じじゃないけど、身なりがきちんとしているので賢そうに見える。けれど、なにより、その声は神社でわたしに声をかけたものと同じであるように感じられた。それは間違いなく。

どつくとつく。

また鼓動が大きくなった。

「いーえー、軽い熱中症ですから、里美、ほらきちんとお礼をしなさい」

いつのまにかわたしの横に移動してきていたお母さんが、そう言っつてわたしに頭を下げさせる。「ありがとございました」と言わされながら、わたしはしつくりこない。どうして、神社のこと、言わないのか。勝手に鍵を外したことを。

大人がなにかを隠すときは、必ずそうする理由があるから。

「夏、外を出歩く時は帽子ぐらいかぶらないとね？」

「……はい」

わたしは疑ってかかる。

「では、里美さんも来たので、説明をもう一度」

ひらしまさんは食卓の上に広げられていた紙をとんとんと揃えた。

「ほら、里美、座りなさい」

「うん」

お母さんに促されて座布団の上に正座して。

「これ、見てくれる？」

「はい」

ひらしまさんはわたしの前に一冊のパンフレットを置いた。表紙には大きな桜の木と、学校の校舎らしき写真。そしてなんだかオシヤレな制服を着た女の子が、ありがちな嘘くさい笑みを浮かべている。この学校に入れて幸せ、みたいな感じ。

「せいき、の、じょしがくいん……」

わたしは印刷されている文字を口にする。

「いいえ、里美さん。聖木乃女子学院中等部^{ひじり・きの}」

「はあ、そうですね……」

そう言われれば、東京に行く途中に木乃という街がある、ことは知っていて。

「来年から、この学校に通いませんか？」

「え？」

「だから？ と聞くよりはやく、見透かされるように言われた。」

「わたしが？」

そう呟いて、わたしは両親や先生の顔を見る。お父さんはなにやら難しい顔をしていて、それはお母さんも近いようで、でも先生は強くうなずいていて。

「そう、府本里美さん、あなたに、是非とも」

そして、ひらしまさんはなんだか凄みのある笑顔でわたしを見ていて。

なにかに巻き込まれてる。
整理できないわたしの頭にも、それは強く感じられた。

1 わたしが、良い子じゃないって。
(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

2 わたしとしても、やめるつもりだったけど？

ひらしまさんは、平島志穂^{しほ}、という名前で。

体操部コーチで、大学時代には跳馬でインカレ三位にもなったことがあるそう。

言われて見れば、正座する脚の筋肉は見知った感じで。

「スカウト？」

話は飲み込める。つまり、物心つく前から、選手だった両親に連れられるまま体操競技の道を進んで、地区の大会ではそこその成績を残している。そんなわたしを学費免除の特待生として迎えたい、そういうことだった。

「ええ。どうかしら？」

平島さんは競技をやっていた人らしいきちんとした笑顔で言った。

「いい話、ですね」

良すぎる、わたしはそう思う。

生まれてから十二年、そのほとんどを捧げてなお、わたしの体操は技能的にもセン斯的にも突出したところはなく。地道な練習で地味に整った、良く言えばそのない、悪く言えば面白味のない、将来性に乏しい、大成しない、そんなものだから。ふつうにスカウトなどありえなくて。そのことはわたし自身もよくわかっているから、別にいいのだけ。

話を聞くわたしを見ている両親の表情がさえない。

全日本にも出たことがあって、わたしに才能がないことは他のだれより、きつとわたし自身よりわかっていて、それでもいつか化するんじゃないかと期待しちやってるお父さんも、オリンピック候補とまで言われた時代もあって怪我で挫折した夢を託してくれちゃってるお母さんも、あからさまに浮かない顔をして、だまつてる。

そろそろ、あきらめどき、だから？

そうかも。両親とも小さいから、わたしの身長もそこまで伸びな

いだろっけど、成長期の身体に負担をかけて体操をつづけるのは大変なことだから。選手としての展望があるならともかく、スポーツとして楽しんでつづけるならともかく、無理してまでって。

「……なんか」

そんな想像したらムカついてきた。

わたしとしても、やめるつもりだったけど？

でもさ。ひとり娘に期待する両親の気持ちをおもんぱかって？

ぱかって脚を広げたり、ぱかって回ったり、ぱかって跳んだり、ぱかって平均台の上で逆立ちしたり、ぱかってレオタード着たり、ぱかってぱかってぱかぱかしいと思う心を押し殺してやってきたよ、わたし。

なのに。

才能ないからよそう、なんて。

そんな言われかた、されたくない。まだ言われてないけど、言われたくない。

遠回しにだって。

「いい話だから。わたし、この学校行ってもいい？」

だから、わたし、満面の笑みで言ってやった。

けど。

「……そうか、ならわかった」

お父さんの反応は想像していたのとは、ぜんぜん違っていて。

「里美、これを見なさい」

そう言って、テレビのスイッチを入れた。

朝の情報番組は、ふだんのゆるい空気ではなくて、コンクリートの瓦礫の山を映していた。今年はそんな映像もずいぶん見てる。でも、それは見覚えのある建物のような気がして、そして、ふと見た食卓の上の写真、聖木乃女子学院のパンフレットの表紙とダブって。ていうか、同じ場所にしか見えなくて。画面の右上隅には、爆破テロ、女子校、の文字。

なにこれ。

「なにこれ？」

思ったままが口に出て。

「……」

お母さんはなにも言わずハンカチで目元を拭った。泣いてる？

「昨日の事件だ。里美は倒れていたから知らなかっただろうが、聖木乃女子学院と、木乃の駅に何者かがテロを仕掛けたらしい。学校はこの有様で、駅に至っては跡形もない」

お父さんはテレビを消し、わたしの目をまっすぐ見た。

「これを見ても、まだ行きたいか？」

「えっ……え？」

どういう意味？

学校にテロ？ 駅が跡形もない？ わたしが行くのはテロのあった街の、テロの標的になった学校ってこと？ それって学校存続できるの？ いや、そんなこと問題じゃなくて、お父さん？ ひとり娘をそんな学校に行かせる気なの？ 正気？

バカ？ ぱかじゃなくて、バカなの？

ありえない。いくらお父さんが体操バカでもそんなことは。

「もちろん」

行かない。行くわけがない。そんな危ないところ。

「そうか、わかった」

お父さんは、わたしの言葉を最後まで聞かなかった。

うちではよくあることで。同じ競技をやったからなのか、スポーツ選手特有のものなのかはわからないけど、お父さんとお母さんは以心伝心で。その娘であるわたしも勝手に以心伝心の中に組み込まれてて、よく、言ってもいないことを合点承知されてる。

困るのだけど。

「お父さんは、ずっと言おうか言うまいか迷っていた」

わたしが口をぱくぱくさせている内に、どんどん話が進む。

「里美、おまえには体操の才能がない」

「……んな」

わかってる、けど、このタイミングで言わなくても。

「技術もセンスも、並のレベルを上回るものはないだろう。やめた
いというのならば、お父さんも無理強いするつもりはなかった。し
かし、やるというのならば、より自分を高みに運ぶことのできる環
境へ向かうべきだ。お父さんやお母さんから離れても」

と、思うと言葉もでなくて。

「才能、技術、センス、言うまでもなくどれも必要なものだ。だが、
それだけで勝てるものでもない。最後にものを言うのは危険へ飛び
込む勇気だ！ プレッシャーの中で自分を見失わない度胸だ！ 不
可能へ挑むチャレンジング・スピリッツだ！」

最後にものを言うものが三つもあります、お父さん。

「体操は常に死と隣り合わせの競技だ。だからこそ、いつでも死を
意識して、その恐怖に立ち向かわなければならぬ。体操をつづけ
るとい意志があるとわかったからには、己を厳しい環境におくこ
とも大切だ。それが里美、才能を超える武器となるはずだ」

そう言い切って、自分の言葉に納得するようにうなずいて。

「娘をよろしくおねがいします」

お母さんが平島さんに頭を下げた。

「ええ、必ず里美さんを立派な選手に育て上げてみせます」

「……」

どうということ？

それは、たしかに言ったけど？ わたし、この学校に行きたいっ
て。うん、言った。でも、ふつう、テロの現場に娘を送り出さない
って、まともな親なら。まともな……そっか、あんまり意識してな
かったけど、まともな親じゃなかったんだ。じゃ、仕方ない。

今、わかったよ。

「あの、よろしくおねがいします」

わたしも、両親に合わせて頭を下げる。

テロで死んでも、体操で死んでも、どっちでも死ぬのは同じ。

なんて、簡単に割り切れるわけもなくて。

また、神社に来ていた。

朝ごはんを一緒に食べながら、テロのこと「二度目ということがないように最高の警備体制を敷くので、日本で一番安全な学校になります」とか、平島さん言ってた、けど。もちろん、それで不安が安心に変わるなんてこと、あるわけなくて。でも、本質はそこじゃなくて。

いいのかな。

わたしの人生、こんな風に流されてて。

よくないな。

賽銭箱によりかかって、神様の扉を蹴っ飛ばして、いつもと変わらずかかっている錠前をがたがた言わせて、汗でしんなりした前髪がそよ風でひんやりして、おなかが空きはじめて、もうお昼ぐらいになつてて、わたし、どうしようもない感じ。

お父さんのことも、お母さんのことも、嫌いつてわけじゃなくて、体操もなんだかんだ言つて、積み重ねてきて、捨てるのがもったいなくて。

だから、新しい環境に行つてみたい気持ちもあるけど。

わたしがほんとうはどうしたいのか、わからない。自分でも。

「もつと、なんか、ないかな……」

「あるよ、里美さん」

眩きに被せるように、後ろから言われて、見上げて。

「あなたには資質がある」

平島さんが賽銭箱の上に乗っちゃって、わたしを見下ろしていた。

どういう理由かわからないけど、巫女さんの服を着て。

「そこ、乗っていいんですか？」

「ああ、これ？ 別にいいんだよ、ここに神様いないから。お賽銭を投げる人もいないし」

「いない？ お賽銭を投げる人も？」

「ていうか帰ったんじゃ」

「帰ってるよ、ここが私の帰る場所だもの」

「体操部のコーチが？」

「あれはウソ。ごめんね。学生時代に体操をやったのは本当だけど、今は、ここを守るのが仕事だから。そして資質のある人を見つけたら、学校に入ってもらうのも。今回は状況が状況なのでやや強引で性急なアプローチを仕掛けたってわけ」

「うそ？ ここを守る？ 資質？ 状況？」

よくわからない。

「昨日のことで一番の難関はご家族の了承だったからね？ もっと時間がかかることも覚悟してたけど、話が早めに片付いて助かったわ。これからが本番だもの」

平島さんは、ぴゅんとジャンプして、扉の前に立つと、鍵も使わず錠を外した。

昨日の夢みたいに。

「それ……」

「里美さんが倒れたのは熱中症じゃない」

平島さんはゆっくりと扉を開いて。

「急に魔力を浴びすぎたから、身体がついていけなかった」

「……ま、りよく？」

わたしが呟いて、平島さんがうなずいて。

「魔力、魔界から溢れるエネルギー。それを操る魔法でこの世界を守る守護者。あなたにはそうなれる資質がある。だからこの場所に入れたし、鍵を開けることもできた」

「しゅごしゃ？」

神社を取り囲む木々が、ざざ、と揺れて。

「ようこそ、里美さん。競技でも偽装されたテロでもない、本当の世界へ」

わたしに手を差し出しながら、平島さんはどこか哀しそうに笑って。

「ほんとうの、世界……」

たぶん、逃げようと思えばそうできたけど。
そうしなかった。

「……ほんとうに？」

くすつと笑って、私はその手を取って、誘われた。
昨日感じた、ワクワクした気持ち、まだここにあったから。

2 わたしとしても、やめるつもりだったけど？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

1 昴 星河

地球を含む広大な宇宙がひとつの世界であるように、『魔界』もまた数多の世界のひとつでしかなかった。それぞれの世界は、それぞれ無関係に存在し、それぞれの時を歩んでいる。世界と世界の狭間は『境界域』と呼ばれるなにもない領域によって時間と空間を隔てられ、本来は交わることもない。

その本来的には交わるはずのない世界の境界を乗り越えてしまふ力こそが、魔界の魔界たる由縁とも言える『魔力』であった。そのエネルギーは欲望する。空間的、時間的制約を無視して魂を求め《転位》し、魂の意志を侵蝕し《変異》する。植物を著しく成長させ、動物を魔獣へとその姿を変え、そして世界を魔界に創りかえる。それは人間も例外ではない。だからこそ秩序に対する大きな危険であった。

そんな魔界、魔力からこの世界を守る存在が『守護者』である。地上に魔力を放出する『魔界の穴』から人を遠ざけ、魔力による影響を最小限に抑えることが彼らの目的である。歴史的、社会的経緯により様々なルーツを持つ彼らだが『魔界の生活技法』通称『魔法』を用いるという点に関しては共通している。魔力を知ればこそ、魔力を用いることでしか対抗できないことは明らかだった。結果、彼らは『魔法』を世に隠しながら、『魔法』を使って世を守る、という二律背反を背負っている。そしてそれは除去困難な『魔界の穴』という原因と共に、解消されることなく一族の秘密として受け継がれることになった。

昴^{すぼ}星河^{のほしが}もそんな守護者の家に生まれたひとりである。

兄一人、姉二人、妹二人、三女の星河が『資質』に目覚めたのは十一歳の冬。

その年はじめて積もった雪で遊んでいる内に、気がつけば昴家の管理する魔界の穴がある古墳へ導かれていた。古墳と言っても本物の墓所ではなく、その時代より受け継がれたカモフラージュである。鬱蒼と生い茂る木々に隠され、魔力を体内に十分吸収していなければ認識することすらできない場所へ誘引されること。それこそが資質の第一条件である。

星河の握りしめた雪玉が氷の塊になっていた。

「なんやの……ここ」

彼女の目の前にはどこか巨人が思いつくままに積み上げたかのような無造作さで、しかし決して崩れないバランスの岩石がモニュメントを作り出していた。アンバランスな構造物は、まるで崩してほしいと言っているようにも見える。

「えらいもんや」

そう呟きながら、星河は内側から湧き出る衝動のまま、雪玉だったものを巨石群に向かって投げつける。フォームもない力任せの投擲だったが、氷塊は積もったばかりの雪を吹き飛ばして、巨石の一つに突き刺さった。およそ人間の膂力ではない。

「すっごいわあ」

投げた星河本人にとってもそれは信じられない光景だった。近付いてみると、突き刺さった岩石に亀裂まで走っている。壊せる。そう思った途端、無闇に楽しくなり、彼女は回りにある雪をどんどん固めて、次々に投げつけた。

巨石に氷塊が突き刺さるたび、キンと甲高い音が森に響く。

「そのくらいにしとき、星河」

「え？」

ひとつの岩石が砕け、古墳が全体のバランスを崩して倒壊するまで暴れた後、彼女は背後から呼びとめられた。ハッと、自分がしかしたことの大きさに血の気が引く。

「……お、お母ちゃん？ これはな、違うんよ、うち、な……」

声の主はすぐにわかって振り返るが、そこにいたのは奇妙な格好

をした母だった。

「ぶっ、ははっ、なんやの、その……ふぐっ」

叱られるという思いより笑いが勝った。子供六人を生んですっかりおばさん丸出しの体型となった母がバレエかフィギュアスケートの選手が着ているような、ラインを見せるピッタリとした衣装を身にまとい、切り株に座って脚を組んでいる。

「それ……くふっ、あかん、笑える、ぶ、ぶふっ。豚のプリマドンナ？」

星河は思ったままを口にした。

「だれがプリマダムや！」

母はそう叫びながら、中指を親指に引っ掛けて弾いた。

「へ？……つぎやはん」

十数メートルは離れていたが、星河はバットでぶん殴られるかのようなゴツンという衝撃と共に、仰向けにひっくり返る。パワーは段違いだ、それは確かにお馴染みとなっている母のデコピンだった。当たった場所に触れると血まで出ている。

星河は青ざめ、飛び起きて抗議した。

「ちょ……お母ちゃん、嫁入り前の可愛い娘の顔になんてことしてんの！」

「そこ？ あんた、ちょっと鈍いんちゃう？」

母は呆れた顔で耳の穴に小指を突っ込んでほじった。

「にぶい？ あんなあ？ こんなん傷跡残ったら、うち……って、あれ？ 治って？」

星河は言いながら手鏡で自分の顔を見ていたが、血を拭うともうそこには傷口もなかった。赤くなった形跡すら残っておらず、何事もなかったかのようである。

「まあ、ええわ。ちょっと見とき」

母はそう言っ、スタスタと崩れた古墳に向かって歩いていく。

「……？」

「よっこいせー」

掛け声とともに、母は崩れた古墳の巨石を持ち上げた。

ひとつひとつが大型の重機でもなければ動かないような代物だけに、それだけでも信じられない怪力だったが、星河が砕いた方の岩石の欠片が勝手に動き出し、元々置かれていた位置へ戻り、みるみるうちに元通りの形へ修復されていく。

「は、へえ」

星河はぼかんと口を開けてそれを見守るだけだった。

「どうや？」

「お母ちゃん、ハムやのうて、スーパーマンやったんや……」

古墳と母を交互に見て、呟く。

「そこはせめてスーパーガールとか、プリキュアとかゆったらどうや？」

「……………そやな、キュアフラワーや」

妹と一緒に見ているアニメについて星河は重々しく言った。

「それババアやる。知ってるわ」

デコピン。

「ぎゃはんー！」

今度はひっくり返らず、踏ん張った。

「キュアムーンライトぐらいお世辞でも言えへんの！」

「高校生やで、お母ちゃんそれは犯罪や」

「セーラーマーキュリーバカにしとんか！」

「しらんわー！」

母娘の口喧嘩はなかなか収拾しなかった。

一通り落ち着いて母が説明を終える頃には日も暮れていた。

「まあ、つまりや、あんたは魔力を身体に吸収して使える、守護者になりうる資質があると。それが今日、ハッキリしたっちゅう話やな。あんたの雪玉で石を砕けたり、お母ちゃんのデコピンが飛んだり、傷がすぐに治ったり、重たいもんも持ち上げられたり、それもこれも魔力によって肉体が強いものに《変異》してるからということになる」

「お母ちゃんが世界を守ってたとか、信じられへん」
しんしんと積もる雪の寒さも気にならないほど、星河は考え込んでいる。

「あくまで昴の家がこの場所をずーっと昔から守ってきたというだけのことや、お婆ちゃんも、ひい婆ちゃんも、その前も。それで、星河はどうする？」

「……どうするて、うちがその守護者になるかどうかってこと？」
「そうや」

母はこっくりとうなずいた。

「そんなん……いややわ。戦うとか、できる気がせえへんもん」

星河は正直に打ち明けた。

話を完全に飲み込めたという訳ではないが、それでも自分がよくわからない魔界とやらからこの世界を守るために命をかけるなど想像もできなかったし、命をかけられるとも思えない。母が命をかけていることすら信じられなかった。

「まともな答えやね」

母は納得する。

「星河の気持ちがあつたらそれでもええ。けどな、これだけは言うておく。残念ながら、資質があるとわかった時点で、どの道へ進もうとも決して自由にはなれへん。あんたには生涯監視がつくし、様々な制限が待つとる。もしならんと決めたら、あんたはおそらく昴の家から遠ざけられる。ここはどうしても魔力の影響が強い場所やからな、その後も、たとえば住む場所も自由には決められへんかったり、職業選択も限られる。結婚もダメな場合がある。海外へも出られへん、国内の移動も事前に許可をとらなあかん。挙げていったらきりがない。まあ、言うてもピンとこんやろうけど」

「……お兄とか、お姉たちはどうやったん？」

母の言葉に心細くなりながら、星河は尋ねる。

「お兄は資質があつたけど守護者にはならん。男が守護者になるのは色々大変やねん。それに守護者の世界が昔っから圧倒的に女主導

つちゆうのもある。けど、大学出て官僚になった。簡単に言えば守護者のバックアップをするために政治の中枢を指すつちゆうことやな、あつちは言うても男主導の社会やから、これは適材適所や」「お兄も資質あつたんや」

「あの子は十七のときやつた。根が真面目な子やつたから大分悩んだみたいやけどな。それで宇宙そらは資質が出てない。穴の近くにずつと暮らしてて出てないんやから、おそらくないんやろう。だからなにも知らんと普通に大学生やつとる。この場合は知らない方が幸せやろう。一族やから監視がないわけやないけど、実質的には普通の子とそんなに変わらん。こういう場合は一生出ないことを祈るしかない」

上の姉について語るとき、母は表情を曇らせる。

星河は唇をきゅつと結ぶ。資質がないことで自由ではあるけれども、家族からはすこし外れてしまふ。それはなんとなく心苦しいことだった。

「銀河ぎんがは十二で資質が出て、守護者になるために学校に行つとる。跡を継ぐ、と言ってくれとるな。歌手になりたいゆうてて、お兄と色々話し合つた末のことやから、すんなりという訳でもない。あの時点ではあの子以外に後継者候補もおらんかつたから、お母ちゃんもかなり無理をゆうた。今はわかつてくれてるとは思つてるけどな」

下の姉について語るとき、母は申し訳なさそうに言う。

「うちが選べるんは、銀河姉のおかげなんか」

俯いて、星河は言う。

「そういうことや。けどな、そのことで星河が遠慮する必要はない。色々あつたんは確かやけど、それはそれや、最後に選ぶんは本人やからな」

「そやろうけど」

星河は顔を上げて、母の目を見る。

「ひとつ聞いてもええ？」

「ひとつと言わず何個でも聞いたらええ」

「ひとつでええんよ。お母ちゃん、守護者やってて死ぬと思ったことある？」

「ある」

娘の言葉に、母は即答した。

「それこそ何度もある。もう十年ぐらい前になるけど、後輩が死んだのも見た。自分がいつ死ぬかもわからん。まあ、給料は悪くないし、色々特典もある。けど、割に合うかどうかは保証できんわ。やるかやらんかは気持ちや。あんたに守りたいものがあるかどうか」「守りたいもの……か」

母の言葉に、娘はうなづく。

星河自身、意外なほど、その感情はしっくりと馴染んでいた。

「あるよ。うち、守りたいもの。お母ちゃん。うち、お母ちゃんも、お父も、お兄も、お姉たちも、みんな。そやから、助けになるなら……」

家族を見捨てる気にはならなかった。

「そんなにすぐ決めんでもええんよ？ 考える時間ぐらいは取れる」「そう言いながら、母は嬉しそうに笑った。

「うち、なるよ。守護者に」

星河も笑う。

そうして彼女の守護者への道がはじまった

1 昴 星河（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9305y/>

候補生たち

2011年12月5日21時52分発行